OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜会員著者紹介＞谷知子著『天皇たちの和歌』
Author(s)	村山, 識
Citation	語文. 2008, 91, p. 101-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69127
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

会員著者紹介

谷知子著『天皇たちの和歌』

村山　識

『中世和歌とその時代』（笠間書院、二〇〇四年十月）など中世和歌の研究で知られる谷知子氏が、単著としては四冊目となる『天皇たちの和歌』を刊行された。

本書は、第一章「天皇と国家」、第二章「天皇と制度」、第三章「天皇と自然」、第四章「民を愛する天皇」、第五章「恋する天皇」の五章から成る。

古代から現代に至るまで、天皇を取り囲む宮廷文化の一つ華が「和歌」であることは言を待たないが、数多くの天皇論の中で、通史的に天皇の和歌を正面から取り上げたものは、おそらく多くはない。谷氏は、これまでなされてきたような制度や役割からではなく、「天皇たちが最も饒舌に語る和歌にスポットを当てた」「通史的」な「天皇論」を書くことが本書の目的であると言う（はじめに）。

本書の大きな特徴は、「通史的」な記述の中で、前近代のみではなく、近現代天皇の歌についても、「古典和歌と同じような手法で」読み解かれていることだろう。

どの章においても、古代から中世の天皇たちの詠歌と近現代のそれとが対比されながら論じられているが、例えば、第一章第三節「国土の歌」では、和歌における「歌枕」の役割を概観された後、後鳥羽院らによる『最勝四天王院障子和歌』と戦後の巡幸における昭和天皇の和歌を取り上げられている。実際の風景を見ることなく「本意」に添って和歌を詠み、国土を概観しようとした後鳥羽院と、全国を自ら巡り、「静かな観察の眼」をもって、その風景や人々の暮らしを詠んだ昭和天皇との比較からは、二人の生きた時代の大きな相違と、それにも関わらず「天皇たちの和歌」が持つ普遍性が浮き彫りにされる。

本音と形式とが分かちがたく混交される中世和歌の諸相を、緻密に解き明かしてこられた谷氏の本領が、公的な行事を除いて、庶民が接する機会の少なくなった近現代天皇の和歌を読み解き、その特質を明らかにする際に生かされているといえよう。

中世和歌の領域においても、『仕子入内屏風和歌』と『尊子入内屏風和歌』との比較など、興味深い内容が多く盛り込まれている。ただ贅沢を言えば、近世期の天皇たちがあまり取り上げられておらず、彼らも含めて論じていただきたかったということであろう。幕府の圧力の下、政治的権力を喪失させながらも詠み続けられた彼らの和歌は、中世とも近現代とも相違する面があるのではないかと思われるからである。

それはともかく、「饒舌」ではあるが、どこかに寡黙さを潜ませる天皇たちの和歌を、読み解こうとするものの入門書として、本書は広く歓迎されるのではないだろうか。

（角川選書四二一、二〇〇八年四月、二三九頁、一，五七五円）

（むらやま・さとる　本学大学院博士後期課程）